

[研究報告]

多角的な思考を育む児童生徒用の観光教材コンテンツ 5例の開発

寺本 潔

要 約

観光を学ぶ教育は必要である。子どもの思考が深まり、観光業への関心も高まる。観光教育を通して自分の住んでいる市や県の発展に寄与したい子どもを育てることになる。多角的な思考を促す学習は、観光を題材にすれば実現できる。観光業が重要な産業である市や県では、もっと観光教育を重要視する必要がある。筆者は教材として5つのコンテンツを開発した。小中高校の段階でもっと観光教育を推進すべきである。

キーワード：観光業, 思考ツール, 白地図, 観光の学び

I はじめに：観光を題材とした教育の必要性

1. 問題の背景

訪日外国人が国内で使ってくれた4.5兆円と日本人の旅行による消費とを合わせると観光で約25兆円近くのお金が使われている（観光庁：2018年度旅行消費動向調査による）。それに伴い販売や不動産などの都市開発、情報産業、ブランド農水産品も伸びている。いまや、観光は我が国の発展に欠かすことのできない産業に成長している。

しかし一方で、教育界における観光を題材とした教育内容は皆無に近く、未だに修学旅行の準備学習としてしか認識されていない。ましてや観光業を担う次世代の育成や重要な産業としての認識は等閑視されたままである。例えば、観光題材に最も関わる小中学校の社会科教科書を開いてみても、小学校で自動車産業や農林水産業、情報産業などの記述が、10数～50数頁にわたるものの観光業は一切触れられていない。中学校では地理的分野で北海道や沖縄県の諸地域学習の場面において観光による地域変容などの紹介が1～2頁あるものの、観光業についての記述はやはり皆無である。公民的分野でさえ、観光まちづくりと人々の協力が描かれていない。観光業や観光の動向は社会のグローバル化や地域創生にも大きく関わり、国連の定義（観

光は平和へのパスポート)でも平和の構築に寄与する魅力的なジャンルであるにもかかわらず、その意義が教育界では語られていない。早急に検定教科書への観光業や観光事象の記述増加を望むところである。

理想的には学習指導要領に「観光による地域振興」や「観光業の重要性」が内容として書き込まれることが必要であるが、次の指導要領の改訂を待たずに、教科書内容に観光題材をもっと加えていく努力が各社の編集担当者に求められるのではないだろうか。社会科以外では、英語の教科書中に外国人の道案内教材が登場しており、とりわけ東京都が開発した教材『Welcome to Tokyo』(冊子体+DVD)に東京都内の観光地や観光資源が楽しい写真や動画で掲載されているのが注目される。さらに家庭科において、観光地で有名な郷土料理を扱ったり、音楽科で旅行先の国の音楽を、保健体育科でスポーツツーリズムを登場させることくらいはすぐに工夫できる。

ところで、旅館やホテル業、土産物店、運輸業、観光協会、出版・広報等で働く方々にとって、観光業界を支える優秀な人材の育成はまったなしの状況ではないだろうか。一部には不足する観光業で働く人材(接客や受付、清掃)を外国人に期待する動きもある。人手不足を補う意味では有効な側面もあるかもしれないが、外国人スタッフだけでは、インバウンド需要を支えることができない。外国から日本文化や自然の美を堪能したくて来訪してくれる観光客に対し、浅薄な知識の外国人がお出迎えして果たして満足いく日本旅を味わってもらえるだろうか疑問である。やはり、基本的には観光の重要性を認識でき、豊富な観光知識を有した日本人スタッフが必要であり、世界水準の観光地として国や地域の発展に寄与してもらう人材の育成が急務ではないだろうか。特に、観光産業がリーディング産業である都道府県においては、観光題材を公教育で扱うことを避けては通れないはずである。今や、主要な国内観光地では販売や接客、観光ガイド、食材の提供、建設、観光協会業務などで多くの仕事が生まれている。ゲストハウスや民泊などの経営に乗り出す若者も多い。高齢化に悩む過疎地域では観光振興は起死回生の策となっている。加えて旅館やホテルのレストランで提供される食材を供給してくれる地元の農水産業にとって、観光は不可欠の需要喚起だ。経済的には、観光による収入を軽視しては地方の持続可能性にも支障が生じるようになっている。

2. キャリア教育

ところで、観光業に携わる経営者自身が、仕事の社会的な意義や観光業の将来像に関して熱くご子息に語っておられるだろうか。果たして産業としての観光業の役割について、子どもに憧れを抱かせるような説明はできているだろうか。我が国の学校で観光業についての確かな学びが行われているならば、後継者育成にもっと安心して取り組めるのではないか。観光業の次世代育成のためだけでなく、地域の持続可能な発展に観光が寄与している府県では「ふるさと教育」の発展形としても観光の学びは価値を持つ。観光の重要性に気付かせ人材育成につなが

る観光基礎教育が推進できれば、総合的学習や社会科等とタイアップし企画力や地域連携力、シチズンシップ（市民的資質）も育成できる。さらに、観光ガイド役体験や外国人観光客へのインタビュー体験で実践の機会を与え、児童生徒に効力感を味わわせることができれば、外国語に対する強い興味を喚起することができる。単に観光業発展のためだけの教育ではなく、国民の観光知の向上は、世界の平和に貢献できる自覚と日本の価値を高める主体的で対話のある深い学びへとつながるだろう。

しかし残念ながら、教育界での観光業の位置づけは極めて弱く、総合的な学習でさえも観光を題材にした学びと観光基礎人材につながるキャリア教育（例えば、観光客へのインタビューや観光ボランティア体験）については、観光庁のHP上での報告資料では、那覇市立開南小学校4・5年や秋田県鹿角市の中学生の鉱山ガイドの事例や佐渡市宿根木集落ガイド、天草市の世界遺産崎津集落の中学生ガイド、法政国際高校普通科の「旅する人の観光学」講座を代表例として、ごく一部の学校で展開されているに過ぎない（ただし、実業系の商業高校では観光科が全国で10数校ほど設置されており、そこでは専門的な教育実践が積み重ねられている）。観光庁においても基礎的な観光教育振興の重要性は認識しており、既に一昨年度よりモデル授業校の選定や公開シンポジウムの開催、啓発動画「観光教育ノススメ」のHP上での公開などに着手し、公益社団法人・日本観光振興協会では観光副読本も作成されている。また、筆者が属する日本地理学会や日本地理教育学会などでも観光教育に関する研究集会を開くようになってきた。

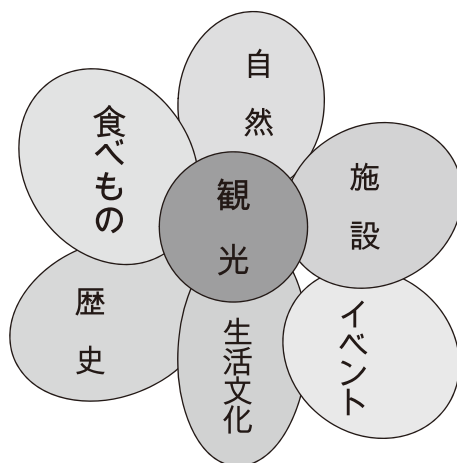
しかし、肝心の観光教育コンテンツと指導法の開発は著しく遅れており、その教育効果さえ十分には立証されていない。それらを補う意味で、本稿では、筆者が過去7年間かけて開発した代表的な観光教材コンテンツを5例紹介すると共にそれらを実際に出前授業を通して実践的に試行した結果を報告したい。

Ⅱ 観光題材への興味・関心を引き出す2つの教材コンテンツ

1. 地域の資源を分類する「観光の花びら」

県や市域を想定範囲として、児童生徒に「自県の魅力を思い出し、具体的に訪れてほしい観光資源はどのような場所や事物があるか“観光の6枚の花びら”ごとに考えてみましょう。」と教師から切り出し、第1図のようなイラストを黒板に描き、発言を引き出し線で書き出すという簡単なコンテンツである。例えば、筆者が2017年に那覇市立銘苅小学校6年生を対象に実施した出前授業を例に考えると、自然の項目には、「サンゴ礁やヤンバルの森、鍾乳洞」などがすぐに思い浮かべることができた。歴史の項目では、「琉球王朝を代表する首里城やグスク、沖縄戦の歴史」などが、生活文化の項目では、「ウチナー口（方言）や赤瓦の屋根、のんびりした生き方」などが、食の項目では、「沖縄そばやチャンプルー、パイナップル」が、イベント・祭りの項目では「全島エイサー祭りや那覇マラソン」などが、建物・施設の項目では、「リゾー

トホテル群や空手会館，国際空港」などの発言が児童から出てきた。県によっては，生活文化や建物・施設の項目がすぐに思いつかない場合もある。それは，その項目の魅力に気付いていない証でもある。反対に6枚の花びらにそれぞれ複数要素が思い出せる都道府県は観光の魅力にそれだけ富んでいることを示している。



第1図 「観光の6枚の花びら」の概念図

2. 地域の歩みがわかる観光開発の年表

二つ目の教材コンテンツは，地域の観光史である。観光がリーディング産業として地位を高めている県は，それなりに観光発展の歩みが導き出せる。残念ながら，都道府県ごとにまとめられた『観光開発史』が未だ見られないため自県や自市の観光開発の歩みを掘り起こすのは容易ではない。関係者への聞き取りや地元新聞に掲載された観光記事の渉猟，関係者からの聞き取り，郷土資料などから情報を収集し，自市や自県の観光開発の歩みを独自に教材作成する必要がある。試みに筆者が取り組んだ例として沖縄県石垣市の観光開発史調査や三重県鳥羽市の例をあげることができる。石垣市（人口5万人）は，八重山諸島の主島であり美しい川平湾やマングローブ林，やし林，ミンサー織り，竹富島や西表島への玄関口として著名な観光地である。これまで，島の観光がどのように発展してきたかを扱った小中学校段階の授業は筆者の出前授業以前では実施されていなかった。過去15回の石垣島への訪問経験がある筆者にとってその点に関する素朴な疑問があったため石垣市立図書館の関係資料を大浜讓指導主事の協力を得て収集し第1表の資料を作成した。その結果，当時の助役であった故・牧野清氏（写真1）の功績が大きかった点が浮かび上がってきた。

牧野氏が助役を務めていた1960年代は沖縄県が本土復帰を果たしていない時代であり，八重山地域の観光開発は緒につき始めた時期である。本土からの団体客が初めて石垣島に来島す



写真1 石垣市元助役・牧野清氏（1910-2000）

ることとなり、牧野氏は真っ先に八重山やしの群生地を案内しようと考えたという。そのころの南島イメージを代表する景観であるやし林を散策する道の整備を休日に役場職員や地元の協力者を得て実施した。浜から白砂（サンゴのかげら）を運び道に敷いた（牧野氏の自叙伝による）。このエピソードを活用し、石垣市大浜小学校5年生むけに実施した出前授業では、「助役の牧野さんが、本土からきた最初の観光客を島の中のどこに案内しようと思ったのでしょうか？」を主発問にした。こうした先人の努力を教材として学ぶことで地域固有の魅力や観光開発の大切さを学ぶことができ、観光開発に対するポジティブな態度を児童生徒に啓発することができる。また、那覇―石垣間テストフライトを成し遂げた株・沖縄ツーリストの創設者の一人である故・東 良恒（ひがし りょうこう）1930年石垣市大浜生まれ。1999年逝去）氏が地元石垣市出身である事実も提示したところ、児童は強い興味を示した。

第1表 児童に提示した石垣島の観光の歩みを表した年表（寺本作成）

年	観光のできごと
1955年	那覇―石垣間テストフライト
1956年	初の民間航空機1日1往復 八重山観光絵はがき作製
1962年	米原のやし林遊歩道整備（牧野清助役の発案）
1963年	八重山観光協会設立
1967年	南西航空 沖縄―石垣間就航
1973年	沖縄県本土復帰
1975年	沖縄海洋博覧会
1978年	小柳ルミ子「星の砂」ヒット記念公演
1980年	第1回ミス八重山選出
1981年	横浜、仙台などに向けて八重山観光宣伝隊派遣

一方、伊勢志摩で有名な観光地三重県鳥羽市においては、観光課で聞き取りした結果、鳥羽

観光の歩みがある程度判明できた。市役所観光課がまとめた資料によれば、昭和25年春に開催された「真珠と海女の饗宴 鳥羽みなと祭りパールカーニバル」が人気を博したことが戦後の観光振興のきっかけとなったようである。その後、26年御木本真珠島設立、30年鳥羽水族館開館、31年鳥羽音頭レコーディング、33年岡山方面にキャラバン隊実施、45年近鉄鳥羽新線開通、48年海女4名同行による東北への宣伝キャラバン、52年鳥羽敬老パック旅行商品発売など努力が積み重ねられている。鳥羽市の学校現場で出前授業は実施していないが、発問としては「当時の鳥羽観光の目玉は何だったのでしょうか？」がよいだろう。真珠と海女という神秘的なワードこそ観光PRには大事であったことが分かるからだ。地域の観光史とその教材化を通して地元への誇りや自信が生まれ、観光開発の歩みを伝える意義も生じる。こうした事実の掘り起こしを通して、地域の特色を生かした観光振興への思いに共感させ、先人の努力なくして自県や自市の観光地は出来上がったのではないことを児童生徒に認識してもらうことが重要である。

Ⅲ 多角的な思考を促す3つの教材コンテンツ

1. 旅行商品を分類するポジショニング・マップ

観光教育固有のコンテンツとして観光マーケティングの基本を学ぶ内容がある。その代表例がポジショニング・マップと呼ばれる手法である（第2図）。例えば、沖縄県へのパッケージ・ツアーの条件を考えるため、代表的な6つのセグメント（観光客の客層）ごとで、どの位置の旅行商品が適しているかを二軸の図に位置づける思考ツールである（写真2）。価格の安さ・高さや保養型・目的型の二軸の図に6種の客層のイラストカードを配置するワークを立案した。個人でなく班で考え合うと楽しい。6つのセグメントが書かれたカードを二軸のどのあたりに位置するかを考えて理由を述べつつ用紙の上に置いてみるのである。

念頭に置く視点は、①引き抜いたセグメント（客層）には、どんな属性があるのか（お金と時間のゆとり）②客層にはどんなニーズがあるのか（観光の目的）である。

設定した観光客層は以下の6種類である。児童生徒が想像する客層のイメージも付記した。

★6つの客層

学生：なるべくお金をかけずに、いろんな体験をしたいだろう。

社会人若手層：学生よりはお金に余裕はあるが、あまり旅行にお金をかけられない、仕事で疲れているので少しはのんびりしたいだろう。

ハネムーン（新婚さん）：東京から来た新婚さん。一生に一度の思い出だからふんばつして二人で満喫したいだろう。

海外ウェディング客：外国人（例えば韓国）なので沖縄という海外で挙式して二人の思い出づくりや両親への感謝を伝えたいだろう。

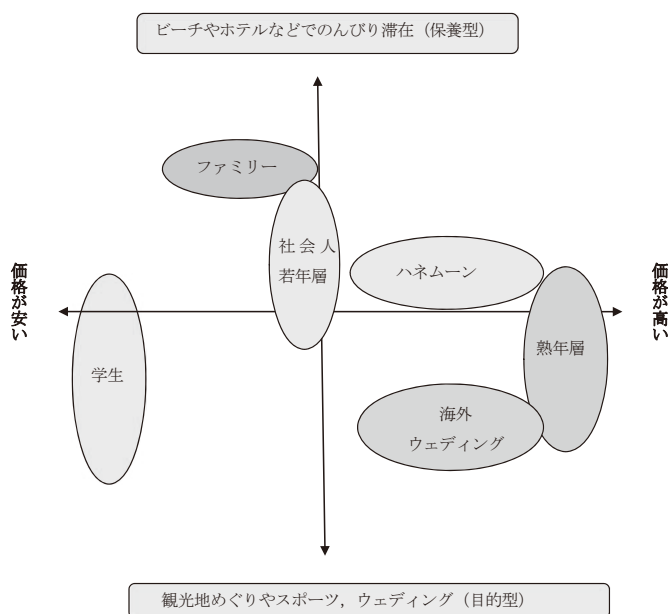
ファミリー層：金銭的に学生よりは余裕あるが子ども連れだから、あちこちめぐらずビーチでのんびりしたいだろう。

アクティブ・シニア（熟年層）：お金に余裕あり、アクティブに観光地めぐりやゴルフ、沖縄の伝統芸能を楽しみたいだろう。＊ワークに必要な時間は、25分。



写真2 ポジショニング・マップで学ぶ児童

沖縄を訪れた観光客のセグメントがどの位置にあるかを考える



第2図 6つの客層ごとで適して旅行商品を考えるポジショニング・マップ

注) 上図は、森下晶美編著 (2016)『新版 観光マーケティング入門』同友館、232ページを参考にした。

2. 観光地の強みと弱みを思考させるSWOT分析

次に教材コンテンツとして着目した手法が、経営学でしばしば用いられるSWOT分析である。これは、観光地の強み (Strength)・弱み (Weakness)・チャンスとなる外部要因 (Opportunity)・怖れ (Threat) の4観点から経営分析する方法であるが、小学6年以上の学齢では思考可能と感じた。那覇市の小学6年や高知市の中学1年で実践した授業でも十分児童生徒は思考できた。箱根町の玄関口である湯本小学校6年で実験的に授業を行った場面において、児童が書いてくれた例を紹介しよう (第2表)。大涌谷での火山活動への懸念なども思考の結果気づいている。児童の親の多くが観光業に従事している地域であるため、この種の学習はもっと公教育で行われるべきではないだろうか。

第2表 箱根町立湯本小学校6年学級で用いたSWOT分析への書き込み一覧

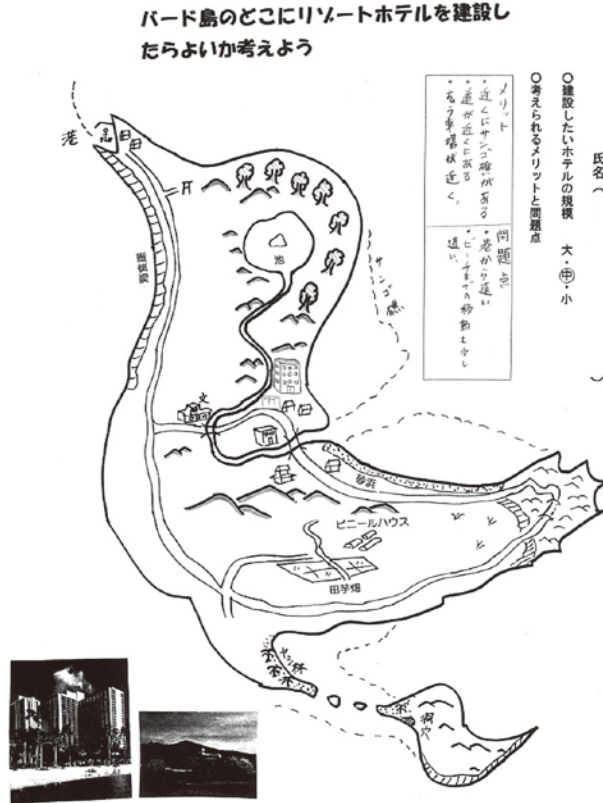
箱根町の観光をSWOTで分析しよう

箱根町の観光面での強み	S	箱根町の観光面での弱み	W
ゲーブルカーやロープウェイなど、あまりない乗り物がある。 温泉+森林浴が、人気で、強みだと思う。 アニメのふたし(ちびまる)がうすの森(らぶら)おんせん(ぐさめ) ⑤ 山の近くで自然がきれい。季節ごとに景色が変わる。 「富士」などの富士屋ホテルなど、おんせん(ぐさめ) ⑤ 馬の近くに商店街がなっている。	山や湖など自然がきれい。季節ごとに景色が変わる。 「富士」などの富士屋ホテルなど、おんせん(ぐさめ) ⑤ 大きいイベント。大行列・馬伝がある。	W 観光地だから売っている物が高い。(せつがたない) W 歴史のさが箱根は弱い。 (巨岩あり) W ぬすめ(盗)の心配がある。 (盗) ⑤ W 平地が少ない 英語(ひょうき)の(かんぱん)などが(すくない) ⑤	W 歴史のさが箱根は弱い。 (巨岩あり)
観光をとりまく機会 (チャンス)	O	箱根町・観光の心配や怖れ	T
オリンピックや大行列の日の時外国の人や果物が来る。 (おんせん(ぐさめ) ⑤)	① 国の(おんせん(ぐさめ) ⑤)に合わせた。観光や大行列した。 (おんせん(ぐさめ) ⑤)	大涌谷のふん火。ロープウェイなどの事故。 大涌谷での火山がどう。 山のゴミや大涌谷の(おんせん(ぐさめ) ⑤)	土石災害 ① 大涌谷がふん火するとおんせん(ぐさめ) ⑤から観光客が来なくなる。 ② 温泉がなくなったら、箱根は(おんせん(ぐさめ) ⑤)に(おんせん(ぐさめ) ⑤)が(おんせん(ぐさめ) ⑤)

解説 付箋に記入された意見の代表的なものとしては、有名温泉地である箱根湯本が学区であったため、温泉や大涌谷などの観光事象に対しては関心が高く、予想以上に具体的な書き込みを得ることができた。

3. 架空の島の開発問題を思考させる白地図

以上、計4つの教材コンテンツを紹介してきたが、5つ目は白地図という題材を用いたオリジナルなワークを開発した。これは架空の観光島 (島の形を描いた) にリゾートホテルを建設



第3図 架空のバード島のどこにホテルを建設すべきかを考える白地図（筆者原図）

注）図中の書き込みは、那覇市公立小学校6年児童の例

するとしたら、どのような規模のホテルを島のどこに建設したいか、またその結果、どのような影響が島にもたらされるかを考えさせる地図ワークである（第3図）。沖縄県で実施した教材であるため、サンゴ礁で囲まれた島の環境について本土の児童生徒よりも関心度は高いと予想される。

このような自然環境と観光開発との関係を考えるコンテンツは、観光教育固有の題材であり、英国などでは地理の教科書で既に取り入れられている。今後、観光公害（オーバー・ツーリズム）問題などが顕著になる自治体では、積極的にこうした地図ワークを導入し、思考水準の高い観光市民を育成する必要がある。自然環境保全をベースに思考できることで持続可能な観光が実現でき、観光客個人には「責任ある観光」の担い手としての振る舞いが求められるのではないだろうか。

Ⅳ 小中高校における観光教育で育成したい能力

1. 観光教育の系統性

以上、筆者が開発した5つの代表的な教材コンテンツは小学校第4学年以上の小中学校において用いることができる。発達段階に見合う内容としては「観光の花びら」は確かに小学生向けの内容と言えるが、高等学校（進学校）で実施してみた場合でも小学生からの意見とあまり大差なかった。高校生といえ、地元であるため観光資源については取り立てて意識せずに高校まで進学してきたせいもあり、自県や自市の観光資源の知識は曖昧なままであった。その点、SWOT分析はやや難しく、中高生にオススメの思考ツールである。しかし、ハワイ州との比較

第3表 小中高校の各段階の観光教育で育てたい能力一覧（寺本私案）

区分	小学生期（4年～）	中学生期	高校生期
特徴	主体的な行動、身近な地域社会や環境への興味や郷土愛を通して、観光者としての素地の形成が望まれる時期	興味や行動の範囲が広がり、権利と責任を理解し観光事象の動向や課題解決方法の理解、観光現象へのまなざしが培われる時期	自己と観光事象との関係を深め、観光の社会的な重要性を理解し市民的資質を備えた確かな観光者として判断が望まれる時期
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・日本や自県、自市の地理的歴史的な観光価値を学び、それらの発展にとって観光は大きな役割を果たしていることを理解できる。 ・写真や地図、統計を読み取り観光事象を適切に解釈することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界や日本の観光動向と産業としての観光業の特性を理解できる。 ・日本や自県、自市に関する観光事象の現状と変化を理解するため、写真や地図、統計、時刻表など各種資料を活用することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光地が発展してきた歩みを理解し、観光地の発展には交通、サービス、資源管理の三者が重要であることを理解できる。 ・ICT活用の技能を高め、写真や動画、アートなど多様な情報メディアを活用することができる。
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・観光業の展開や観光資源の保全は多様な産業や社会の仕組みと関わりながら営まれていることを考えることができる。 ・仲間やゲストと対話しながら、よりよい観光の在り方を思考し、観光地に関するガイド文（簡単な英語での紹介を含む）やコラージュ作品、ビデオクリップに表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光振興には自然、社会、経済、文化が調和を保ちながら発展することが不可欠であることを考え合うことができる。 ・仲間やゲスト（含、観光業の専門家）と対話しながら、持続可能な観光の在り方をSWOT分析などを介して思考し、基礎的なマーケティングの視点から観光振興について自分なりの意見を適切に表現できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地理総合や公共、総合的な探究の時間で学ぶ機会に世界や日本の観光の在り方を思考し、観光振興と環境保全の間に見出せるジレンマや近未来の観光業や観光地の姿について考え合い、適切に解決策を判断できる。 ・仲間やゲストと問題意識を共有し、プロジェクトベースの学習に基づき観光問題の解決策をプレゼンできる。
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・観光事象の楽しさや観光業で働く人のやりがいに関心を抱き、進んで自県や自市、自国の観光資源や観光振興、観光業に関心を持とうとする。 ・持続的な観光について興味や関心を高め、自分も地域社会の一人として何らかの役割りを担おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光事象を見つめる多角的な「観光のまなざし」を獲得し、進んで自国や自県、自市の観光振興や観光業の動向や役割りに関心を持とうとする。 ・持続的な観光について興味や関心を高め、自分も国際社会や地域社会の一員として何らかの役割りを担おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光地が抱えている諸問題（例：オーバーツーリズム）に関心を抱き、進んで国や自県、自市の観光課題の解決に向かおうとする。 ・グローバルな視野から持続可能な観光や責任ある観光の大切さに気づき、確かな観光者としての対人関係や語学、企画力等の資質を磨こうとする。

で沖縄県のSWOT分析を那覇市内の小学6年生に行った出前授業では、見事に児童は意見を導き出すことができた。おそらく比較の対象を置くか否かでも思考の深まりが異なってくると言えよう。架空の島の白地図ワークも小学校高学年以上のどの段階の学習者でも実施可能である。島だけでなく、狭い路地のある旧市街地、人口の少ない過疎の村などを事例に白地図化して開発問題を思考させることも有効であろう。

これらの傾向から、筆者なりに観光教育で育つ能力を新しい評価規準に即して立案し、さらに小中高校生期の3つの発達段階を想定し系統性に配慮してみたのが、第3表である。荒削りな面は残っているが、現時点で観光教育の資質・能力育成に系統的に言及した論文が見当たらないため、一定の意義はあるものと思われる。ご批判頂ければ、幸いである。

2. 地域の魅力を価値にかえる能力

観光教育はふるさと教育を単にグローバル化したものではない。ふるさとへの愛着と誇りはもちろん醸成されなくてはならないが、地域の歴史や偉人、地名に詳しいだけでは地域産業の衰退や自治体の統廃合が進む中で、かえって知識が活用できず浮遊するだけである。例えば、北海道という観光地の魅力を例に検討してみたい。本州に住む者として北海道の持つ広大な自然と魅力的な食、アイヌ文化は観光価値として真っ先に浮かんでくる。道民の次世代である子どもたちも北海道に多くの観光客が来ている事実は知っているものの、道外の人から説明を求められた場合、案外その魅力を客観的に表現できないものである。発言として出てくる観光地や観光資源はメディアで見聞きした紋切り型の情報にとどまり、北海道が持つ風土の魅力（テ



写真3 アイヌ文様を色紙で切り抜く児童（札幌市公立小学校4学年）

ロワール・Terroir) が語られない。また、雪の魅力も児童にとっては、あたり前の事象と映っており札幌市などで冬季気軽に家族で楽しめるウィンター・スポーツや雪遊びそのものが観光資源であることに気付いていない。筆者が昨年、札幌市内の小学4年児童に対して「観光資源として見るアイヌ文化」の出前授業を行った際にも、アイウシ・モレウのアイヌ文様の美しさに初めて気づいたようであった。また、道東や道南に旅したことがない児童も多く北海道という単位を丸ごとつかむことができず、「ほっかいどうがく」の推進にとっても課題が残った。

一方で観光は、地域の魅力を一種の価値に高めなくては資源として活用できない世界である。たとえ山奥に美しい紅葉スポットがあっても屈強な登山家しか見ることのできない場所であったなら、そこは観光地とは言えない。交通路の整備や紅葉スポットを楽しめる展望台の設置、観光情報の整備、紅葉だけに頼らない通年の楽しませ方の立案などの工夫がどうしても必要になってくる。そうした問題解決の学びこそ観光教育にしかできない固有の学びと言えないだろうか。

観光の魅力の大きな要素として食があげられる。いわば特産物である。これもいくら地元で食されている味わい深い食材や料理が有名であっても即、観光商品とはならない。商品化にはマーケティング戦略が必須で、果たして来訪者の味に見合うか、来訪者が一度に食べる量的に適切な食材はどれくらいか、ネーミングの工夫や食の背景に横たわる物語、通年もしくは一定期間同じ味を確保できるか、そして適切な価格の設定や販売網など検討すべき課題は山ほどある。これらの複雑な課題や問題の解決には高校生くらいならば挑戦できる。高校で始まる「総合的な探究の時間」は本来、そうしたリアルな問題解決の場にしたいものである。しかも、現代はSDGs(国連持続可能な開発目標)が重視され、産業界もこぞって旗印として掲げている。観光業も当然このゴールに無関心ではならず、持続可能な観光や責任ある観光をキーワードに発展できなくてはならない。

欧州においても2016年に持続可能な観光に向けての欧州観光の指針が作成されている。そこでは、増え続ける観光入込客への適切なマネジメントと社会、文化、経済、環境のインパクトへの対応策が27の指標として策定されている(European Union:2016)。我が国においても、欧州同様の問題が顕在化しつつある。また、先に挙げた食の商品開発にも伝統文化維持、里海や里山の保全、労働環境の改善、食材ロスの回避などが問題視される。観光を題材とした学びを通して実社会に生きて働く能力が身に付く機会となる。そうした意味で、地域の魅力に気付かせ、それを観光客といった他者目線で意識させつつ、「魅力を価値に高めていく学び」を通して様々な知識や技能、思考力・判断力・表現力が獲得できる。今後、さらに教材の整備や教育方法論の検討を進めていく必要がある。

V 観光の基礎人材育成への期待

前述したように現時点では教科書への記述が皆無に近い観光業であるが、既存の单元でも導

入できる箇所がある。例えば、小学校社会科第4学年の単元「わたしたちの県の様子」に位置づく、伝統工芸品の扱いがあげられる。教科書には数頁を使って伝統工芸品である焼き物や織物、木製品などの生産工程や技術の継承の大切さが解説されているが、観光商品としての扱いは不十分だ。現実には工芸品の多くは一部の年配の富裕層や外国人観光客の購入で支えられており、小学生を持つ若い家庭ではほとんど購入されていない。つまり伝統工芸品が子どもや若者の世界では縁遠いものとなっている。

筆者が指導助言した社会科授業で工芸品の大切さに気付かせるため、子どもたちに向かって「皆さんを含め日本人が買わない・使わないなら、もう伝統工芸品は無くなってもいいんじゃないか？」と思いついた切り込み方で「ゆさぶり」を試みたことがあった。第5学年の農業単元でもブランド米や日本酒、リンゴや柑橘類は観光資源に高まっていて、旅番組で紹介される大半の特産品は観光商品と言える。農水産物の生産も販売あつての工夫である。観光農園や魚広場での水産加工品販売など、観光客が何を求めているかをもっと社会科で扱うべきであろう。情報の単元でも新聞やテレビの仕事は扱っても様々な観光情報が多様な産業を活性化している実態は教えられていない。小中学校のいずれの普通教育段階でも観光客のニーズやマーケティングの基礎さえ扱われていないのが現状である。せめて、北海道や沖縄県のように観光がリーディング産業である県では観光教育を意識的に推進し次世代育成に向かわないと当地の観光産業の将来が危ういのではと懸念している。観光教育の重要性を観光界あげて訴え、地元の教育界に向けて観光業に関する内容を扱うよう働きかけてはいかがだろうか。我が国が観光先進国へと発展するために優秀な人材がこの業界に集まってくる必要性については、誰しもが賛同して下さると思われるが、その具体的施策については未だほとんど動きがない。ようやく一昨年から観光庁観光産業課で観光教育推進のためのささやかな予算が付き、プロモーション動画「観光教育ノススメ」が作成されたに過ぎないのである。

欲を言うなら観光業は地域色も強く現れるため、各地のDMOが地域の観光基礎人材育成に関与してほしい。先進的な試みでは、沖縄観光コンベンションビューローが63頁カラーの小中学生向け『観光学習』副読本を編集し県内の小学校に無料で配布している。また、小中学校現場に観光の専門家が出向いて「未来の産業人材育成事業」として観光業の大切さや面白さを直接子どもたちに伝えている。将来の我が国の観光業の発展を期待するのであるならば、市や県の教育部局に観光教育推進の必要性を分かってもらえることが大事であろう。観光は裾野が広い業種のため各種の産業によい影響を及ぼす。弱点は相手あつての産業である。日韓問題により、韓国と日本の間に横たわる観光客激減の問題はいうまでもなく、東日本大震災の直後や新型コロナウイルスの流行によっても観光需要が冷え込んだ。そうした政治や災害・感染症リスクこそが観光の最大の敵なのである。これらのリスクや制約にも打開策を模索できるレジリエンスの強い人材は簡単には育たない。観光基礎教育の本格的な展開を期待するところである。

謝辞

2011年より始めた観光教育研究も8年が過ぎた。この間、次の多くの方々から有益なご示唆やご支援を頂戴した(敬称略)。澤達大(京都文教大)・中村哲(玉川大)・宍戸学(日本大)、田部俊充(日本女子大)・吉田和義(創価大)・池俊介(早稲田大)・桃原のぞみ(沖縄県)・大島順子(琉球大)・伊集満枝(八重山高)・新保元康(NPOほっかいどう学推進協議会)・荒木時雄(東京観光財団)・山崎誠(JTB総合研究所)・北島哲也(日本観光振興協会)・小倉勝登(文科省)以上の方々にして感謝の意を表します。

なお、本研究は文科省科学研究費基盤研究(C)研究題目:ESDに立脚する小中高一貫した観光教育のカリキュラムの構築(課題番号18K11848)を使用した。

参考文献・発表順

- 創立45周年記念誌編集委員会(2004):『創立45周年記念誌』沖縄ツーリスト, 231p.
- 森下晶美編著(2008):『観光マーケティング入門』同友館, 165p.
- 深見聡(2014):『ジオツーリズムとエコツーリズム』古今書院, 197p.
- Hawaii Tourism Authority(2015): Vision 2015, Tourism Workforce Development Strategic Plan The Journey to Excellence, pp. 1~15.
- 寺本潔(2015):自県の資源と世界遺産の価値に気付く小学校社会科・観光授業.『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第5号, pp. 33~44.
- 寺本潔ほか(2016):小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究—沖縄県を事例に一.『玉川大学学術研究所紀要』第21号, pp. 1~18.
- European Union(2016): The European Tourism Indicator System-ETIS toolkit for sustainable destination management, 27p.
- 田本由美子・寺本潔(2016):『資源はっけん!観光学習—沖縄県石垣市立石垣小学校4年の実践を中心にして—』(日本離島センター平成27年度離島人材育成基金助成金報告書) pp. 1~32.
- 寺本潔・澤達大編著(2016):『観光教育への招待—社会科から地域人材育成まで—』ミネルヴァ書房, 165p.
- 大島順子(2016):観光の教育力の構造化に向けて.『観光科学(琉球大学)』第8号, pp. 73~86.
- 寺本潔(2017):『教師のための地図活—地図帳・地球儀・防災・観光の活かし方』帝国書院, 77p.
- 寺本潔(2017):島の栽培植物と寺院の観光資源としての価値に着目した学び—沖縄県石垣市の小学校4年生への出前授業を通して—.『論叢(玉川大学教育学部紀要)第17号』pp. 37~61.
- 寺本潔(2018):小学校における観光を題材とした学びの現状と課題—札幌・対馬・石垣の3市への現地調査をもとにして—.『論叢(玉川大学教育学部紀要)第18号』pp. 165~184.
- 村田和子(2018):『家族旅行で子どもの心と能がぐんぐん育つ旅育BOOK』日本実業出版社, 190p.
- 深見聡(2019):『観光と地域—エコツーリズム・世界遺産観光の現場から—』南方新社, 110p.
- 寺本潔(2019):若者が憧れる観光業へ—DMOに託したい観光教育支援—.『旬刊 旅行新聞11月11日号』4面掲載記事。

Development of Five Teaching Tourism Contents Based on Diversified Thinking for the Child and the Student

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

The education for learning tourism is necessary. Child's thinking is deepened, and interest in the tourism industry rises, too. The children who wants to contribute to the development of my prefecture are brought up through the tourism education.

If the tourism is made a theme, the learning which suggests diversified thinking can be realized. You must take tourism education more seriously in the prefecture which that tourism industry is important. I made five teaching – materials as a subject.

We should more promote tourism education at the stage from elementary education to higher education.

Keywords: tourism industry, thinking tool, blank map, learning tourism